

Ωだとバレた秘書は、α社長の運命の番にされました
く抑制剤を切らされて、毎晩執務机でく

体
験
版

第1話

異動辞令、六年仕込みでした

月曜の朝、八時十分。

漣は本社十二階の経営戦略部のフロアで、ノートパソコンを段ボールに移していた。

人事部から、辞令が下りたのは三十分前のことだった。

神宮寺社長専属秘書への異動。即日付。

紙を、二度読み返した。

半年前、社内になきな噂が流れた。

漣と同期入社の子黒崎が別の女と関係を持っていたという話。

漣は匿名の通報でその不貞を知った。

自分から、別れを切り出した。

黒崎は捨て台詞を吐いて去った。

「お前みたいに感情のないβ女と付き合ってもつまらないんだよ」

その台詞は、半月かけて社内に広まった。

漣は論理派キャリアという評価を感情のない女という評判に上書きされた。

経営戦略部での居場所は、半年前から徐々に減ってきていた。

そして今日、最上階のCEOフロアへの異動辞令。

澪は段ボールを抱え、エレベーターホールへ向かった。

（ご栄転おめでとうございます、と笑った人事部の声が、まだ耳に残っている）

澪はエレベーターのボタンを押した。

最上階のCEOフロアに荷物を置いたのは夕方の五時。

社長専属秘書の机は、CEO執務室の手前の控えの間にあった。

控えの間には副秘書の平塚という四十歳の男が一人、すでに座って待っていた。

平塚は深く礼をした。

「橘さま。本日よりよろしくお願いいたします」

漣は微かに眉を寄せた。

「橘さま」と呼ばれるのは、家紋を持つ家の娘への呼び方だ。

橘家は薬学界では知られた家ではあるが現代の財閥相手にこの呼び方は、奇妙だった。

平塚は続けた。

「神宮寺社長は、橘さまの件、六年お待ちでございます」

漣は呼吸が一瞬、止まった。

「あの、すみません。六年というのは何のお話ですか」

平塚はひとつ目を伏せた。

「ご本人より、後ほどお話があるかと存じます」

（六年）

滯は机の上の紙を指でなぞりながら考えた。

六年前といえ、母が他界した年だ。

母の死からちょうど、六年。

なぜ、その数字が自分の異動と重なるのか。

（落ち着け。論理的に考えろ。今日は初日。情報を整理しろ）

夜の九時。

CEOフロアは、夜になっても照明が落ちない。

平塚が漣を執務室の前に案内した。

「橘さまをお連れしました」

扉が、開いた。

CEO執務室は夜景の見える壁面ガラスと、漆黒の革の応接セツトと、長い執務机で構成されていた。

机の隅に古い絹の小箱が、一つ。

漣は一瞬それに目を止めたが、すぐに机の前に立つ男を見た。

神宮寺冬馬。

二十八歳。

神宮寺ホールディングス代表取締役CEO。

長身細身、黒髪の設定アップ、灰青の瞳。

業界では「氷の御曹司」「フェロモン耐性の化け物」と評されている男。

「橘滯です。本日付で、専属秘書として……」

冬馬は手を上げて滯の挨拶を止めた。

(え)

冬馬は微笑んだ。

ゆっくりと机を回り、漑の正面に立った。

灰青の瞳が、漑のこめかみのあたりを上から下までゆっくりとなぞった。

「ふうん？それで、優秀な部下ちゃんは、いつまで自分のことを『β』だと言い張る気？」

漑の体が硬直した。

「失礼ですが……どういう、ご冗談でしょうか」

冬馬は滯の顎の下に長い指を一本だけ添えた。

「冗談で言ってると思う？」

平塚が深く礼をして扉を閉めた。

退室の音が、二人きりの執務室にことりと落ちた。

「君のフェロモン、薄いね。よく抑えてる」

冬馬は滯のうなじの後ろにもう一本、指を添えた。

「でも、最近抑制剤の効きが緩くなってるね？」

滯の血が足元から引いた。

「俺のΩ」

冬馬は低く、囁いた。

「六年、待ったよ♡」

（待って）

（待って）

（情報、整理、しろ、私）

滯は咄嗟に一步下がった。

冬馬は同じ歩幅で一步前に出た。

「私は……契約の駒では、ありません」

漣が必死に声を絞り出した、一言だった。

冬馬は聞こえていないかのように漣のスーツの一番上のボタンを静かにひとつだけ外した。

冬馬はシャツの首元の、自分のシルクのネクタイを片手で抜き取った。

漣の白い手首を、執務机の縁に押し付けた。

ひとつ縛り、ふたつ縛り。

ぎゅ、と、絞った。

「俺のΩに、ご挨拶しとけよ？」

濡のジャケットが、肩から滑り落ちた。

ブラウスのボタンを上から二つ、冬馬の指先がひとつずつ、外した。

ブラウスの胸元の隙間に冬馬の指が一本、滑り込んだ。

「やあ……っ♡」

（あ、あ、声、出ちゃ）

冬馬の指は薄絹のブラの上から滯の胸の頂をつまんだ。

「ねえ？俺のΩ、すぐ硬くなるね♡」

「あ……っ♡」

布越しにつままれて、軽く捻られた。

「く、く、くだ、しゃい……っ♡」

滯の声が敬語のまま崩れた。

崩れた敬語の方が、冬馬は気に入ったらしい。

うなじの後ろに唇が、落ちた。

「ちゅう♡」

「ちゅう♡」

「ちゅう♡」

「ちゅう♡」

「ちゅう♡」

うなじの皮膚を湿った唇が、何度も這った。

濡のうなじの腺が薄く、震えた。

（あ、ここ、ダメ、ダメ、ダメ、私の腺、覚醒、しちゃう）

「ふうん？ここ、効くね♡」

冬馬の指先が滯のうなじの腺の上を爪の腹で軽くなでた。

「あ……っ♡」

「ぷっ……♡」

ほんの軽い、甘噛みがひとつだけ落ちた。

本契約には足りない、けれど、消えない印を残す、甘噛みがひとつ。

滯の膝が執務机の脚の前で崩れた。

「ちゅううう♡しようか？」

冬馬は滯の太ももを片手で開かせた。

タイトスカートが、腿の付け根まで押し上げられた。

（待って、まだ、待って、初めて会う人、なのに、私）

（六年、お待ちでございます、って、平塚さん、言って、た）

冬馬の舌が滯の薄絹の下着の上からまず、一度動いた。

「ちゅぽ♡」

「ちゅぱ♡」

下着の繊維越しに湿った熱が、染み込んだ。

「あ……あ、しゃちよう、しゃちよう、ま、待って、く、くだ

しゃい……っ♡」

冬馬は滯の声に笑った。

笑ったまま、下着の脇を指で横にずらした。

白い太ももの間が、執務室の照明に晒された。

「ふうん？もう、こんなに♡」

冬馬の舌は今度は、布越しではなかった。

濡の薄い肌に直接、触れた。

「ちゅぱ♡」

「ちゅぱ♡」

「ちゅぱ♡」

「ちゅぱぱ♡」

「ちゅぱぱぱ♡」

「あ、あ、ああ……っ♡♡」

漣の腰が執務机に跳ねた。

「らめ、らめ、しゃちょう、しゃちょう、らめ、れすっ……っ

♡♡
」

冬馬は舌をお豆さんに当てた。

軽く、転がした。

「こりこり♡こりこり♡こりこり♡」

「ふああああ♡♡」

漣の白い手首がネクタイの中でぎゅ、と、握られた。

冬馬は舌を止めず、下着の脇から指を一本、滑り込ませた。

「ぐちゅっ♡」

「ぐちゅっ♡」

「ぐちゅっ♡」

「ぐちゅっ♡」

滯の中はもう、湿っていた。

（やだ、私、知らない、こんな、こんな、こんなふうに、体が）

「俺のフェロモン、効いてるね、運命の番♡」

冬馬は指を二本に増やした。

「ぐちゅぐちゅぐちゅ♡」

「ぐちゅぐちゅぐちゅ♡」

濡の目から涙が、ひとつだけこぼれた。

「あ、あ、あたま、おかしく、なりましゅ……っ♡♡」

冬馬は指を三本に増やした。

濡の中の、奥のほうの、固い場所を爪の腹で軽く引っ掻いた。

「ねえ？ここ、初めて触られるところだろ？」

「あ、ああ、らめ、らめ、しゃちよう、らめ、れす、ふか、す

ぎ、ましゅ……っ♡♡」

「ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡」

「ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡」

滯の腰が執務机から浮いた。

お腹の奥のほうが熱く、絞られた。

「いき、ましゅ、いき、ましゅ、しやちよう、らめ、らめ、れ

すう……っ♡♡

「いいよ、いきな、運命の番♡」

「ふあああ♡♡♡」

滯の体が執務机の上でひとつ大きく跳ねた。

太ももの内側が、痙攣した。

冬馬の指が滯の中でぎゅ、と、絞られた。

「上手♡」

冬馬はゆっくり指を抜いた。

濡れた指を滯の唇の前に、持っていた。

「自分の味、覚えとけよ？」

滯は震えながら自分の指の濡れを舐めた。

冬馬はベルトを外した。

長い指が、滯の太ももの裏を執務机の上に押し上げた。

「上に、乗りな」

「は、はい……っ♡」

（はい、って、言っちゃった、私、はい、って）

冬馬は漣のうなじを再び、軽く啜えた。

甘噛みのまま、本契約には入らないままで。

冬馬の腰が最初の一突きを漣の中に入れた。

「だちゅんっ♡」

「ふあああ♡♡」

漣の喉から見たことのない声が、出た。

「ぱちゅんっ♡」

「ぱちゅんっ♡」

「ぱちゅんっ♡」

「ぱちゅんっ♡」

冬馬の腰はまだ、浅かった。

半分くらいまでしか、入れていない。

「ふうん？まだ、奥、当ててない♡」

「あ……っ♡」

「奥、当てて、いい？」

「あ、あ、あ……っ♡♡♡」

漑の答えを待たず、冬馬の腰が深く沈んだ。

「だちゅんっ♡」

「ふああああ♡♡♡」

漑の白い背中が、漆黒の机の上で弧を描いた。

「だちゅんっ♡」

「だちゅんっ♡」

「だちゅんっ♡」

「だちゅんっ♡」

冬馬の腰が執務机の縁をゆっくり何度も揺らした。

「ぱちゅぱちゅぱちゅ♡」

「ぱちゅぱちゅぱちゅ♡」

「ぐちゅぐちゅぐちゅ♡」

（やだ、やだ、やだ、こ、こんな、初日、初日、しゃちよう、

しゃちよう）

（しゃちようの、おち、ぽ、おつき、すぎ、ましゅ）

漚は心の中で必死に業務日誌のように状況を整理しようとした。

けれど、整理できる単語はひとつも、なかった。

冬馬の腰が深く深く子宮口にぐぐつ、と、当たった。

「ぐぐつ♡」

「ふああああ♡♡♡」

漚の腰が執務机からまた、浮いた。

「ねえ？ここ、好き？」

「は、はい、しゃちょう、しゅき、れす、らめ、れすっ……っ

♡♡

「ぐぐっ♡ぐぐっ♡ぐぐっ♡」

子宮口を亀頭で、軽く何度も押された。

冬馬の親指の腹がピストンの最中、お豆さんを軽く転がした。

「こりこり♡こりこり♡こりこり♡」

「あ、あ、らめ、らめ、お、お豆、らめ、れす、奥、らめ、れ

すっ……っ♡♡

「ぱちゅんっ♡ぱちゅんっ♡ぱちゅんっ♡

「ふあああ♡♡♡♡

濡の中がぎゅ、と、絞られた。

冬馬の額に薄く、汗。

冬馬は濡の耳元で低く、笑った。

「俺の名前、呼んでみ？」

冬馬の手が滯のうなじの腺をもう一度押した。

「ぱちゅんっ♡」

最後のひと突きで滯の体が執務机の上で跳ねた。

うなじの腺が、震えた。

冬馬は滯の中に最奥までゆっくり注ぎ込んだ。

「とぷ……♡」

白い熱が、滯の腰の中に満ちた。

（あ、あ、これ、出されて、あ、私、私、知らない、こ、こんな、感覚、知らない）

冬馬は濡の中でまだ、抜かなかった。

ゆっくりもう一度腰を、深く入れた。

「ぐちゅっ♡」

「あ……っ♡」

「俺のだ、覚えとけ♡」

「は、はい……っ♡」

冬馬は漕の中で自分の出したものをもう一度奥のほうへ、押し込んだ。

「ぱちゅんっ♡」

「ぱちゅんっ♡」

「ぱちゅんっ♡」

「あ、あ、また、また、いっちゃ、ましゅ……っ♡♡」

「いきな♡何回でも♡」

「ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡」

漣の体が執務机の上でもう一度跳ねた。

冬馬の中だしが、もう一度奥に足された。

「とぷ……♡」

「ぴちゃ……♡」

漣のお腹の中はもう、冬馬の白で満たされていた。

冬馬の指が漣のうなじの腺の上を最後にもう一度なでた。

「ぷつ……♡」

軽い甘噛みが、最後にひとつ残された。

滯の意識が遠く、なった。

冬馬は滯のうなじに最後の、唇を落とした。

「上手だったな♡」

滯は執務机の上で、トロリ♡と、崩れた表情で、目を、閉じた。

冬馬はゆっくり自分のシルクのネクタイを滯の手首からほどいた。

滯の白い手首にはネクタイの跡が薄く、残っていた。

冬馬はその跡を指の腹でなぞった。

なぞって、軽く笑った。

（俺の、Ω♡）

（六年、待ったよ、お母さん♡）

冬馬は机の隅の、古い絹の小箱に一瞬、目をやった。

絹の小箱の中の、漣のために特注した、婚約指輪は今夜はまだ、出さない。

漣が自分で選ぶ日まで絹の小箱は、開けない。

冬馬は自分のジャケットを漑の白い肩に、ふわり、と、かけた。

夜の十一時。

漑は神宮寺グループ専属の運転手の社用車で自宅マンションまで送り届けられた。

平塚は車内に同乗せず、運転手だけが沈黙のまま運んだ。

漑のうなじには消えない、薄い、甘噛みの跡。

漑の指は震えていた。

自宅マンションは母から相続した、古い小さな部屋だった。

滯は玄関で靴を脱ぎ、廊下を歩き、母の遺品が残る書斎の前で一度止まった。

六年前、母が亡くなった日から書斎の引き出しの一つは開けないままだった。

滯はその引き出しを初めて開けた。

古い革の手帳が、ひとつ。

滯は震える指で手帳の最後の頁を開いた。

「漣へ。」

もしこの手帳を読んでいるなら、あなたは大切な選択を前に
しているはず。

あの子（冬馬）を信じなさい。

彼はあなたのことを命より大切にする。

——真由美」

漣の手から手帳が、ひとつ落ちた。

涙が、ひとつだけほおを伝った。

（お母さん）

（あなたは何を、知っていたの）

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。